

大規模・多回育養蚕農家における桑葉確保の実態(1)

誌名	山梨県蚕業試験場研究要報
ISSN	0388953X
巻/号	35
掲載ページ	p. 1-5
発行年月	1996年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



大規模・多回育養蚕農家における桑葉確保の実態

(1) 「買い桑」の有効活用

久津川 剛・網蔵一明

TSUYOSHI KITSUKAWA and KAZUAKI AMIKURA : Present situation of mulberry leaves supply in sericultural farm of large scale and multiple cycles of rearing. (1) Effective use of purchasing mulberry leaves.

山間傾斜地では、桑園の集団化及び機械化が極めて困難であることから、養蚕の大規模・多回育化を図る場合、如何にして桑葉を質・量ともに安定して確保するかが大きな課題である。

そこで、山間傾斜地で大規模・多回育養蚕を行っている農家を対象に桑葉確保について実態調査を行い、「買い桑」を活用した大規模・多回育化の可能性を検討した。その結果、「買い桑」を有効に活用することによって、養蚕の大規模・多回育化が可能であり、またこれが地域の遊休桑園の有効活用に役立つことが明らかになった。

「先進国型養蚕業」の確立に向けた取り組みがされているが、この中では基幹労力2人で年間飼育10回、繭生産量10tを目指している。

このような大規模・多回育養蚕を推進するためには、如何にして桑葉を質・量ともに安定して確保するかが大きな課題である。このためには、桑園を集団化し、これに機械力を導入し、桑園の肥培管理や桑収穫労力の大幅な節減を図るのが理想的である。しかし、山間傾斜地では、桑園の集団化及び機械化が極めて困難である。

そこで、このような地域において、大規模・多回育養蚕の可能性を明らかにするため、「買い桑」を活用し、大規模・多回育養蚕を行っている農家を対象に桑葉確保についての実態調査を行ったので、結果の概要を報告する。

調査に御協力頂いた調査対象農家に対し感謝の意を表する。

なお、本調査結果の一部は、日本蚕糸学会中部支部大会(1995)において発表した。

材 料 と 方 法

調査対象農家は、山梨県南巨摩郡増穂町のA氏である。増穂町は、甲府盆地の南西部で南アルプスの前衛、櫛形山、丸山の山麓に位置しており、桑園は傾斜地に分布している。

A氏宅の農業従事者及び耕地面積は、第1表、第2表のとおりであるが、自己管理桑園の内訳は自作地1.4ha、借地4.0haである。

また、早くから大規模・多回育養蚕を目指し、このための条件整備を進めてきており、平成6年には年間8回で124箱を飼育し収繭量5,080kgを上げている県下最大の生産規模である。

調査は、平成6年の桑葉確保方法等を中心に聞き取りにより行った。

第1表 農業従事者

続柄	年齢	農業従事	能力
本人	41才	○	1.0
妻	41	○	1.0
父	71	○	1.0
母	66	○	1.0

第2表 耕地面積 (単位: ha)

水田	桑園			普通畑	合計
	成園	未成園	計		
0.20	5.10	0.30	5.40	0.04	5.64

結 果 と 考 察

平成6年は年間8回で124箱を飼育しているが、1蚕期平均は15.5箱となる。これを蚕期別にみると最大は第1蚕期（5月7日掃立）の18箱、最少は第8蚕期（9月15日掃立）の12箱である（第3表）。

桑園についてみると傾斜地に分散しており、機械導入のための条件整備も十分でないことから、桑収穫及び桑園管理の多くを人力に頼っている。

しかし、自家労力で桑収穫、飼育及び桑園管理を十分に行っていくには限界があることから、大規模・多回育養蚕を目指して当初から「買い桑」を導入している。一般的に「買い桑」は、何らかの事情により手持ちの桑葉が不足した場合に補填的に導入される例が多いが、A氏の場合には地域の休・廃止した養蚕農家の桑園を計画的に利用し、全蚕期にわたって有効に活用している。

第3表 平成6年の掃立量及び収穫量

項目 \ 蚕期	第 1	第 2	第 3	第 4	第 5	第 6	第 7	第 8	計
掃 立 月 日	5. 7	5.22	6. 6	6.26	7.19	8.24	9. 3	9.15	
掃 立 数 量 (箱)	18.0	17.0	17.0	17.0	15.0	13.0	15.0	12.0	124.0
上 繭 収 量 (kg)	915	690	670	640	449	566	693	457	5,080

蚕期別用桑量に対する「買い桑」の比率は、第2蚕期（5月22日掃立）が88.5%と最も高く、次いで第3蚕期（6月6日掃立）の77.4%と第7蚕期（9月3日掃立）の62.0%が高い比率となっているが、これは前後蚕期の飼育作業との兼ね合いを考慮し、労力ピークの切り崩しのため「買い桑」を多くしたためである。

「買い桑」の年間合計量は68.6tで、年間用桑量に対する比率は51.2%となり、これによって大規模・多回育養蚕が成り立っていると言える。また、この「買い桑」量は地域の桑園能率より推察して6.5haの桑園から収穫されており、その分の地域における遊休桑園が有効に活用されていることになる（第4表）。

第4表 用桑確保方法及びその割合（平成6年）

（単位：kg）

項目 \ 蚕期	第 1	第 2	第 3	第 4	第 5	第 6	第 7	第 8	計
用 桑 量	22,490 (100)	19,550 (100)	17,270 (100)	17,450 (100)	15,430 (100)	13,840 (100)	16,960 (100)	11,010 (100)	134,000 (100)
自己管理桑園 からの採桑量	15,150 (67)	2,250 (12)	3,900 (23)	12,450 (71)	8,700 (56)	7,350 (53)	6,450 (38)	9,150 (83)	65,400 (49)
買 桑 量	7,340 (33)	17,300 (88)	13,370 (77)	5,000 (29)	6,730 (44)	6,490 (47)	10,510 (62)	1,860 (17)	68,600 (51)

注) () 内は用桑量を100とした指数

この「買い桑」桑園の管理は「売り手側」が全て行っているが、毎年、契約を交わし、利用計画及び桑園管理等について指示、協議を行い、良質な桑葉を安定して確保するための努力を行っている。

「買い桑」には、収穫を「売り手側」が行い、運搬は自己で行うものと、収穫・運搬とも「売り手側」が行う、いわゆる「持ち込み」の2つの方法で行われている。

「買い桑」に対する「持ち込み」の比率を蚕期別にみると、第2及び第3蚕期は絶対量が多く、持ち込み割合も高いが、これは前後蚕期の飼育作業及び桑園管理作業等との兼ね合いから労力の大幅な節減を図るためのものである（第5表）。

第5表 買い桑の内訳（平成6年）

（単位：kg）

項目 \ 蚕期	第 1	第 2	第 3	第 4	第 5	第 6	第 7	第 8	計
買 桑 総 量	7,340 (100)	17,300 (100)	13,370 (100)	5,000 (100)	6,730 (100)	6,490 (100)	10,510 (100)	1,860 (100)	68,600 (100)
うち自己運搬	4,960 (68)	10,950 (63)	8,840 (66)	3,770 (75)	5,490 (82)	5,240 (81)	9,140 (87)	420 (23)	48,810 (71)
うち売り手側運搬	2,380 (32)	6,350 (37)	4,530 (34)	1,230 (25)	1,240 (18)	1,250 (19)	1,370 (13)	1,440 (77)	19,790 (29)

注) () 内は買桑総量を100とした指数

次に「持ち込み」は周辺の農家によるものが多いが、自己で運搬するものは概して遠くの桑園が多く、その平均距離は約5 km程度であり、積込みを含めた往復時間は1時間程度である。

「買い桑」と労力節減の関係について、下村(1987)は年7回育の大規模農家において重複する蚕期を中心に飼育労働ピーク時に「買い桑」を導入することが労働配分上有効であることを報告しており、これからも「買い桑」導入が有効であると考えられる。

一方、高齢化等により売り手が減少傾向であることから、桑収穫の機械化を図るべく、借地桑園でも貸し手の了解を得ながら計画的に改植を行っている。

なお、「買い桑」代金は条桑1 kg当たり、「自己運搬」のもの18円、「売り手側運搬」のものは20円であり、これを合わせた買い桑の総額が繭販売額に占める割合は約15%であった。

以上のことから、「買い桑」を有効に活用することによって山間傾斜地においても養蚕の大規模・多回育化と省力化が十分可能である。

また、これにより、地域の遊休桑園の利活用が図れ、農地の荒廃化の防止等にも役立つものと思われる。

なお、これの経営評価等については別途報告する予定である。

文

献

下村 茂(1987) : 年7回等間隔大規模飼育養蚕農家の経営技術. 埼玉蚕試研報, 60, 71~74